

名前のない星戯曲賞 選考委員 講評

「あなた」と出逢いたくて 容原静

今回の選考で私は「新しさ」「説得力」「熱意」を重視し選考した。加えて私だからこそ、私しか選ばないような、私の胸をうつ作品の評価を高めた。私自身、多くの応募者と同じく何らかの受賞を目指す一劇作家。選考委員といえども権威、実績はない。そのような一人の若手として、謙虚に一作品と個でぶつかる事が賞や作品のためになると考えた。自分は物語の筋よりも言葉、意味の苛烈さ、必死さ、激情さ、慟哭がある作品が好きだ。情念で描き尽くした作品が好きだ。観念的な作品が好きだ。劇的な作品が好きだ。「好き」を胸に秘めながら選考を進めた。「新しさ」を感じさせる作品は、少なかった。ないと言ってもいいかもしれない。どこかで見たことがある、読んだことがある、自分でも知っている感覚、場所、知識の世界と出逢うことが多かった。出逢えた作品の一つ一つは面白かった。それぞれに味があった。各々の闘い、苛烈さを秘めていた。しかし、新しいと思えなかった。そもそも書き手が「新しさ」よりも別の部分を優先している気がした。「新しさ」ってなんだろうか。内容云々以前に未知の「書き手」「作品」と出逢う事がそもそも「新しさ」のはず。読者を殴ってほしい。もっと強く。私の感性は鈍い。「新しい」って。其処に言葉が、存在が、情念が、世界があるって強く揺さぶる、もっと起こす、ぶん殴るテキスト、言葉を見たかった。そういったテキストとも出逢った。その時胸が震えた。私が震えるならば、きっと誰かも震える。人を感動させるテキストは何よりも尊い。「説得力」。どの作品にも良さを感じるが、選考する必要がある。他の作品ではなくその作品を選ぶに値する理由。選ばれないことの虚しさは承知している。それを誰かに突きつける重み、責任。自分が泥を被ってもいいと思える何らかの説得力。キャラがいい、筋立てがいい、センスがいい、何でもいい。何かあるならば、感じさせる「説得力」を大切にしたい。そして何よりも「熱意」。熱さ。ダサいかもしれない。格好悪いかもしれない。別にいいじゃないか。泥臭くて。感性豊かで、センスが良く、機転が利くなら、例え此処で私が推さなくても、見いだせなかったとしてもきっと何処かで別の誰かが貴方を推薦する。その時はあの時の選考委員、ほんまセンスなかったなと笑えばいい。話を戻す。今回の選考委員は私一人ではなかった。私とは全く違う視点で選考する方々がいた。私は私の価値観に集中出来る環境だと感じた。貫く事にした。最後はやはり、テキストの裏側に眠る想いが私の頬を殴るか否か。それぐらいの熱情。私は技術以上に精神的な部分を重視した。やはり強烈な「好き」という感情、想いで仕上がったテキスト、勢いのあるテキストに勝るものはない。例え今未熟だったとしても、その作家は挫けず作品と向き合い続けていくであろうと期待してしまう。技術だつてつく。人気も出てくる。若手は失敗してナンボ。恥かいてナンボ。強欲に、どこまでも夢に向かって、何度も何度も挫けず書き続ける作家こそ次世代を担う。書いて書いて書きまくって、誰かに届けよう、楽しんでもらおう、傷ついてもらおう、安らいでもらおう、笑ってもらおう、不思議がってもらおう、びっくりしてもらおう。想いが溢れて止まらない。書いても書いても満足出来ない。そんな

劇作家こそ名前のない星に相応しい。ジャンル、趣味趣向。書き手の思想、哲学、その他諸々でなく。「熱意」を重視した。若手による若手のための権威なき戯曲賞だ。いま一番みずみずしくなくてどうする？ この門に相応しい選考基準か否か。模索しながらの選考でした。選考を終えて全体に感じた事、少し残念に感じた事は「ブラック」な作品、「濃い」作品が少なかったことです。攻めている作品でも「マイルド」「ライト」に纏められている。現代の道徳、倫理観が作品に及ぼす影響力が凄まじいなと感じました。自分が読むのを途中で拒否してしまう、絶対にこんな舞台見たくないと思わせてしまう、台本をぐっちょんぐっちょんに破り棄ててしまうような作品があってもいい。言葉が抽象的過ぎて、インテリ過ぎて、解説不能な重さを持っている戯曲があってもいい。もっともっと自分が知らない価値観、世界の言葉、人物、行動を戯曲通して出逢いたい。そう思いました。「知らない」ことを知りたいです。ふれ幅はもっと広くてもいい。「わからない」作品をもっと知りたい。

大賞には二作品が選ばれた。そのうち私は「首の皮一枚」を最終的に推した。自分の中で作中に登場する人物を見棄てることが出来なかったからだ。何がいいのか、わるいのか。どの作品にも良さもあれば脆さもある。駄目な時にほど愛が確かめられる。弱さを目にして手放すことが出来ない作品は特別だ。議論を重ねる中で作品の脆さを肌で感じたが、それでも尚劇中で闘う登場人物の情、輪郭が私の中で色濃く残った。こんな経験は初めてだ。どうしても見棄てられなかった。それはやはり作品として「力がある」ことだと私は思う。

一つ一つの作品に関しては寸評で触れることにする。選考委員という活動を通して私自身も成長することが出来た。また戯曲、演劇に対してよりいっそう熱を入れて取り組む必要を感じた。『今更』演劇をやるなんて時代遅れにもほどがある、やめときなよ。早く就職しなよ、演劇なんてやめてさ。演劇は終わったと業界の老人は僕に教えてくれました。そんな声ばかりではない新時代をむかえたい。自分勝手にわがままを貫くせかいではなく。演劇、戯曲は本当におもしろい。このおもしろさを沢山のの人に伝えたいだけ。一人一人が貴重な星です。きらめきです。あなたの、あなただけの、あなただからこそそのささやかな、かけがえのないこえを、これからもテキストにしてほしい。そしてたくさんの人、ひとりひとりに届けてほしい。みんなライバルでなかまです。これからも切磋琢磨、闘っていきましょう。私は私に出来ることをする。わたしが届けられない部分を誰かが、たとえばあなたが担ってほしい。それが文化が文化たる理由に繋がる、豊かさそのものとなる。胸を張って活動します。社会に必要だと言い切ります。

また新しい作品と出逢う日を、心待ちにしている。「あなた」のこえを。書いてください。勇気を出して、苦しみと闘いながら、時には離れて、それでも戻ってきた貴方の挑戦の果て、「作品」が出来上がった暁には。私まで届けてくださると幸いです。それではまた何処かでお逢いできる日を心待ちにしております。さようなら。また逢う日まで。